

三作品ともほとんど変わりなく動作表現語に下接しやすい。「まゐらす」では、使用法について「きこゆ」が会話文から地文に、「たてまつる」がその逆へと変化していることと、「まゐらす」が「きこゆ」系の分野で勢力を伸ばしてきたため地文に使われやすくなり、上接語は「きこゆ」の衰退により感覚語に多く承接しやすくなっているようである。なお上接語については、資料の数の上からは、感覚語には、「きこゆ」系が、動作表現語には、「たてまつる」が下接しやすく、「まゐらす」は動作表現語、感覚語ともに上接語にしやすい。

「きこゆ」「たてまつる」の特質は、互いに反対の地位を形作っている。このため、両語の特性を合わせ持つていた「まゐらす」も「きこゆ」の衰退に伴って伸びてくることから、後には「たてまつる」とは違った性格を持った語

安部公房とフランツ・カフカ

——メタモルフオーゼをめぐる——

原岡弘子 (23回生)

目次

序

第一章…カフカの『変身』について

第二章…安部公房の作品と時代認識 (省く)

として、その地位を確立している。

四語の調査・考察を試みたが、諸説のように、「落窪」から「とはず」までの四作品においても、およそ三百年の間に、それぞれ変化していることが明らかになった。

参考文献

補助動詞「きこゆ」から「まゐらす」への漸移相

——女流日記作品を中心に—— 宮地 幸一
宮 腰 賢

東京学芸大学紀要二二人文

中世前期の「たてまつる」Vと「まゐらす」V

——平家物語を資料として—— 古田 洋子

親和国文四

古代の敬語Ⅱ 森野 宗明

講座国語史五敬語史 大修館書店

第三章…メタモルフオーゼについて

第四章…カフカと公房

あとがき…公房の可能性……………(省く)

(注)について……………(省く)

主な参考文献……(省く)

序章

比較文学は十九世紀後半の研究分野であり、日本においては、戦後に「日本比較文学会」が発足している。(略)

吉田精一氏は、比較文学の学問的領域を、中心部分として第一に外国との直接的影響の部門、第二に挾義の比較文学の枠をはずれて日本古典の近代文学への影響、第三が一種の対照的研究といふべき非直接的関聯に於ける比較研究の三領域に分けている。アメリカ比較文学における「対比」研究の許容は、世界文学への志向と比較文学を一般文学と考ふる所からきており、吉田氏の「対照」的研究の理論的根拠は社会学的比較対照である。

吉田氏は比較文学は文学の比較ではなく、文学史の分野であるという点を強調している。(略)

私はフランツ・カフカと安部公房のそのメタモルフオーゼをめぐって比較するが、その時代差のうちに公房の内部まで文学的醗酵が醸し込まれたと断言はでき兼ねる。

各国民文学をふまえた文学における普遍性を探つていきたいと思う。

第一章 カフカの「変身」について

ドイツ系ユダヤ人カフカは(1883~1924)若くして結核で死んだが、生前は無名の作家であり、在世中発表された数篇の短篇は、友人マックスブロートの出版によ

るものである。カフカ文学の解釈は時代の変化につれて、より深化したのであるが、一九三〇年代から様々な危機を内向きさせていたヨーロッパ社会は、第二次世界大戦によって一挙に崩壊して、人々は不条理の現実の中で、もはや如何なる存在の根拠をも持ち得ない状況にあった。カフカの解釈はシュルレアリスムによるもので、無意識の表現、夢と幻想の文学世界として把握されるが、シュルレアリスムの持つ全面的自由はカフカには無く、表現のアナロジイも表面上でしか無いというのが定説である。つづく一九四〇年代は、現実の不条理世界へ回帰した解釈となり、サルトル等実存主義者がカフカ文学の現実への位置づけをした。

又、宗教的アプローチもあったが、「こゝに一貫する事は、これらを入意味Vの文学としてとらえる事では軌を一にしていた」と金井氏は述べている。

意味の文学とは、つまり、サルトルのA参加の文学Vに集約される実存主義的、社会学的解釈のあり方であろうが、戦争と侵略の時代を体験した人々のカフカ解釈も一九五〇年代には、あまり通用しなくなる。五〇年代には「何故書かか」よりも「如何に書かか」を問う技法の分析が行われるのである。

注目すべきは第二次大戦後のカフカ解釈の背後における、文学者、哲学者の時代認識である。不安や虚無の不条理世界を、彼等は戦争による破壊によって体験したが、この体験に相当するカフカの内部は如何にして作られたか、という点について考えてみるのは重要である。ユダヤ世界、権

威的な父親、官僚主義的職場、の要因が上げられる。

作品「変身」(一九一五年)について考えると、特に職場意識が否定的に表われているといえよう。エムリッヒは「フランツ・カフカ」で次の様に述べている。

「現代の仕事は人間を脅かす。人間はそれに自らを委ねている自分自身の救助者をも拒否し救済を妨げる」

ザムザの変身は、前人間の魂の内部を象徴するのであって、職業から逃れたいとするザムザの背後にはカフカ自身が存在する事も忘れてはならないだろう。エムリッヒの指摘する「世人が自我と事物の桎梏でたどりつく実存世界」はザムザであると同時にカフカのものである。仕事についている限り、彼は救われない存在で、又自己満足のうちに職場と家族に利用されるだけの存在であり、変身によって露呈するその事実を彼は疎外される自身(害虫)の死でしか解決し得なかつた。

労働は変革のエネルギーとして捉えられないものであり資本主義社会における生活を放棄した変身現象は、世人から自我への離脱であると解釈すべきであろう。

変身の超現実的、又は寓話的題材は、カフカの周囲現実のひずみを表わす為、用いらざるを得なかつた方法であり、この非現実こそが何人も、逃れることの出来ぬ最高の現実性V(エムリッヒ)なのである。変身により彼の存在は、嫌悪すべき異物となり、父の投げた林檎が背中に入り込んで遂には死に至るのである。

グレゴールは変身前の職業人、つまりダス・マンから(Dro-

gesierer)への変身によってダス・イッヒ(自我)を実現させる事が、現実において不可能であることを表わしている。死によって敗北したグレゴールと対比的に家族はすがすがしい空気の中で、郊外に出かけ新しい生活への希望に満たされるのであり、グレゴールのエゴイズムから解放される。結局彼は必要ではなかつたのだ。変身は夢から目覚めた時、起つていた。

小児性逃避傾向がカフカ自身にあった事は見逃せないがその(Ungesierer)は受動的な反抗ではなかつたか。

マヤ・ゴートは、カフカの変身を「人間存在がこうむる恥じよくと墮落の極致を表現している」と言っているが、変身は墮落ではないし、むしろ人間存在を認識する上で肯定的、積極的な意味を持つと私には思われる。

第三章 メタモルフォーゼについて

変身の意味と歴史現実におけるその位置づけを考察した場合、特に、フロイト理論とマルキシズムの合体であるシユールリアリズム、実存主義、マルキシズム文学理論、の三つの方向からメタモルフォーゼを捉えたい。

ヒューマニズムと現実変革の革命原論であるマルキシズムで変身という状況を広く捉えてみた場合、エンゲルスは「自然弁証法」の中で、「猿が人間になる際の労働の役割で人間と動物の最終的本質的差異をもたらすものを労働と規定する。歴史上の社会的、政治的、変動により、生産と

經濟關係の矛盾から社会変革が起こり、新しい段階へ発展していき、そこに求められる人間は意識としてでなく、対象に働きかける力としてあるのである。人間は働きかけて対象を変容させると共に自らもその事によって変容する。

しかし今日の状況は、人間と人間の關係が、物と物の關係におきかえられ、人と物の倒錯した關係は人間は物以下の人間であり、組織の部分品でしか無い。現実との関わり方も複雑化し、人格疎外の現象が現れている。人間は状況を変える主体性を持たず、状況に組みこまれてしまい、労働における個人の人格は拠りどころを失って、アトム化してしまった。十九世紀的な人間であるロビンソンクルーソー型の人間は現代社会には居ない。ここで、変身に二つの意味が言えよう。つまり(1)歴史的現実の主體的に関わり変革し乍らより高い段階へ自己を変革すること。(2)人間性の喪失によって、本来的な人間でなくなる。ことである。

労働と変革の意志によって人間は状況を開拓するとし全体の解放の前段階に労働者階級の解放をめざしたマルキシズムでは、変身も労働によるなら次の解決も労働である。(2)の変身は労働権を取り戻す斗争によってのみ、人格としての人間に復帰出来ると言えよう。

いわゆるメタモルフオーゼは古今東西を問わず神話や物語に多く語られるが、マルクスは「それらは、空想の中で空想の助けをかりて自然の力を克服し、従属させ、組織するものであり、従って自然の力の現実的支配と共に消滅する」としている。現代の文学題材に変身という異常なもの

があっても当然である。変身のモチーフは現実への対置であり悲劇的狀態から解放される為の斗争をうったえるのである。

シュールレアリズムはフロイトからの直接影響はないがフロイト理論をよりどころとし、半睡状態の「自動記述」を方法とするものであり、現代の認識変革、価値転換を求めたが、そこでは、非現実、無意識、潜在意識、の世界が展開され、夢と幻想のうちに拡大して行く。シュールレアリスト達は現実に対して無関心の態度をとり乍ら超現実的なものをもって現実を克服しようとした。

変身は、不安回避、現実逃避、メルヘンのあこがれ、など様々な意味で人間の欲求を満たすのである。

マヤ・ゴートは、シュールリズムをあらゆる制限を拒否する生の肯定とし、絶望や、変身の恐怖さえ、快樂の一つの原料でありすべては奇怪で新しい感覚であり、そこに八個の解放をめざす個人の高揚があるVとしてゐる。第一次大戦後、資本主義の矛盾が広がり始め、不条理と不安が溢れた時代、死や、無機物化や、無能性(小児性)への夢さえもが、シュールリズムにとっては人間の生の肯定を裏付ける欲求であったといえよう。

メタモルフオーゼがマルキシズムでは現実対置を喚起させる手段であったのに対し、シュールリズムでは現実欲求の、非現実での満足におきかえられ批判性は弱いものとなるのである。現実に対する根本的な精神の態度として、現実存(絶対的主体といべきか)を本質に先行させる実

存主義において、人間は自らを世界に投企し、歴史の主体者であり、社会を構成する存在である。

分業を基本とする現代資本主義社会の組織は、大沢氏の指摘する様に、「人間の中の組織」、呼応者も能動者へ転化させられる組織から、「組織のなかの人間」への転換がみられ、非人間化と人権喪失は拡大する。

しかし、社会的、歴史的に規定された物としての自己、人間疎外の状況を認識しただけでは、実存を理解し、人間性を回復することは出来ない。実存主義哲学は多くの論を持ち、真の実存を神や限界状況におくものもあるが、ここではサルトルの社会的実践としての実存主義に注目したい。人間は無限定自由であり、自己の行動によって本質を創造するとし、最もマルキシズムへ接近した論を展開する。

人間疎外の克服についてサルトルは、疎外された人間を対象とするのではなく、客体化している自己を奪還し、主体的個別的自己を持つことであって、生産力の発展や社会制度によるものではないとする。集団の中の個の確立、他者からの解放によって真の実存へ向かおうとする。

実存主義におけるメタモルフオーゼは、自己存在の現実存を状況との斗争の中で実現しようとするものであり、その異常さこそが無限的自由のメタファであると思われる。

カフカの「変身」のグレゴールは、自己本来に成るべく害虫となるのであり、害虫化がもたらす他からの疎外こそがグレゴールの実存への希求を強くうったえると言えよう。

(略)

集団を離れた個なる人間を考える実存主義では、個を実現する方法を明示出来ない為に、変身の桎梏の中でグレゴールの様に死ぬしかない。変身によってグレゴールは自己の実存を認識したが、あらたに変身する事が出来ず疎外状況から脱け出さず精神内部の肉体疎外をもつて了つてしまふ。

現代の人間疎外の意識は資本主義社会の性格でありゲームインシャフトからゲゼルシャフトへ重点がおかれ、商品による人間支配(人間の手段化、物化)が行われている。

マルクスは(人間の)本質は一人一人の個人に内在するなどの抽象物でもない、現実においては、人間の本質は社会関係の総体であるとしていた。絶対的自己でなく、社会に意志的に存在する相対的自己は何らかの労働によって社会にかかわっていく。だが今日の労働は下部構造の生産と生産関係の矛盾から上部構造へ力を及ぼし、新たな経済関係をもたらす以前に労働自体が労働者の疎外の原因を生み出すものでもある。マルクスの指摘するように、労働は(労働者にとって)外在化し、労働者の活動は自己活動ではなく他人に所属し、自己自身の喪失をもたらすものである。人間は動物的諸機能に自由な活動を営む自分を感じ、人間的な諸機能において動物としての自分を感じるのである。主体としての人間は認識的自我を表わすのでなく、ひとつの対立の過程をとって自己発展する統一態をいうのであり(認識された真理に従って)状況を變形するという人間の持続的な斗争が要請されよう。状況のメタモルフオーゼ

を日常性からとらえる安永氏は、人間の变身Vは、内面的自己否定Vであり、自己自身をもふくめた日常性の圧力に抗した存在の変形であり、単なる外形の変形ではなく自己の内部から自己の形態を超えることとしている。実体としての人間が機能としての人間に変貌している現状では、その状況を描くこと自体が批判行為となるとすれば、人間を異端なものに変形させて描くことも又現代文学の政治的性格から現代状況の批判が表現されるのは当然である。たゞ、読者がそれをメルヘンや幻想ととるか、実存の桎梏ととるか、現実変革の訴えととるか、問題外である。

第四章 カフカと安部公房

カフカの影響を特に感じさせるのは、作品「壁」―「Sカルマ氏の犯罪」であらう。

カフカと安部は存在の喪失という点で類似的だが、佐々木氏は、「安部公房の作品から、カフカほどには、凄まじい、抜け道のどこにもない永遠に繰り返される人間の姿をいつまでも追いかけてくる日常生活のおぞましさと、恐ろしさを感じない」という。安部公房は、カフカにおける絶望が生の出発点であり、世界の果てこそが自分のアパートの小さな部屋である事を知り、そこから出発していこうとする新しい人生の可能性Vを認識する作家である。安部は「内なる辺境」でユダヤ系作家と彼自身のテーマを考察しているが、ユダヤ人問題にふれて、単に人種偏見だけでは片付けられない、現代社会に内在する深い病根であり、

ほとんどすべての時代にわたってあらゆる国の反ユダヤ主義者達が、必ず例外なしに「正統な国民」のイメージを農民的なものとして描き出し、逆に都市的なものに、諸悪の根元と見ていたという事実だけをもってしてもユダヤ人が単なる他者（人種的異物）ではあり得ない事の充分な証拠たり得るのではあるまいか。ユダヤ人の存在が反ユダヤ主義を生んだのではなく、ユダヤ人は存在してたのではなく存在させられた。

△国家はかつて辺境の異端と斗い今日の内なる辺境の異端にむかつて正統擁護の斗いを開始しなければならない。V安部公房は内なる辺境の形象化作品として「壁」や「砂の女」「他人の顔」などを書いたが、ユダヤ人カフカも又、基盤の存在喪失、異端性という内なる辺境に立つ作家である。「私のカフカ」で安部公房はカフカ世界のとぎすまされた分析力Vだけに注目し、△芸術家であるVとしながらもカフカを否定され超えられなければならない世界という。又、カフカは異様なリアリティをもって資本主義社会の中で分裂した小市民の絶望的な姿を、われわれが眼をつむろうとしていたゆがめられた己の内部を鮮かに照らし出すとするのである。安部はカフカを思想をもって解釈せず、分析的傾向の小児の世界との類似を見ながら、カフカの分析力に匹敵する総合力を対置すべきである。Vとしている。これは状況に関わる自己の可変性であり、状況変革の可能性を打ちだす実践であると思われる。カフカの人間存在の陰惨な孤絶性が安部公房のものではないのは、

両者の時代状況の差異もあるが、カフカ以上の存在の苦痛を体験していないだけに安部公房は意識の自由とその実現化を志向する事ができたのである。異端としての罪の意識、ユダヤ人である事からの苦悩は、安部が故郷喪失者である以上に強かったはずである。

安部公房の変身譚にはどこかに現実変革（若しくは反抗）があり存在の可塑性をもつのである。安部は人間が棒に

なるという非現実だが想像力に訴えてくるイメージをもつて仮設の文学を創造したのである。カフカの動物嗜好を感じさせるグレゴールの変身は、人間の故郷喪失とか無益な探求とか逃亡とかいった苛酷な真実を明らかにする夢のイメージからいきなり始まる。メタモルフオーゼは本質的にゆがめられた人間の実存の直喩と現実逃避による救済の象徴である。

良寛——和歌を通して見たその人間像

宮腰 千絵

序

「晩秋がすぎるとみぞれまじりの空模様となり、雪がこいがかはじまる。積雪は県境山地では3m〜4m、栃尾・小千谷・十日町・新井では2〜3m、村上から新潟田・三条長岡・高田にかけて1〜2mにもなる。わずかに新潟・新津・柏崎の海沿いと佐渡が1m以下である。雪崩は初雪と融雪期にしばしば襲う。十二月末から四月中旬まで根雪がある豪雪地帯は丘陵地から県境山地である。雪が消える四

月末には梅と桜が一時にひらき、かわいた山越えのへだしの風が吹きおろす五月には農家は急にいそがしくなる。」これは、平凡社世界大百科事典による新潟県の《気候》の欄の抜粋である。この新潟（越後）こそ、良寛がその人生の大半を過ごした土地であった。

ところで、久松潜一氏は、『日本文学風土と構成』の中で、「国民生活や文学と季節との関係にしても独自の季節がその国の国民生活や文学に影響を与えらるとともに、その国民